

令和 4 年度 第 2 期 未修者小論文試験問題

受験上の注意事項

- 1 監督者の指示がある前に、この問題を開くことを禁止します。
- 2 試験開始の合図により、解答を始めてください。
- 3 試験開始の合図の後、印刷不鮮明等に気付いた場合は、黙って手を挙げ、監督者に申し出てください。
- 4 解答は、答案用紙に黒インクのペン又はボールペンにより書いてください。
消せるボールペンや時間の経過により字が消えるボールペンは使用しないでください。また、鉛筆は不可です。
- 5 試験時間は90分です。
試験開始後20分以内及び試験終了前5分間は、答案の提出及び試験室からの退出はできません。それ以外の時間に退出（途中退出）する場合には、黙って手を挙げ、自席で答案及び問題を監督者に渡してから退出してください。
- 6 この問題は、試験終了後、持ち帰ることができます。
- 7 次のもの以外は机上に置かないでください。
受験票、筆記具、時計（計算機能等のないものに限る。）、眼鏡。
受験票は、氏名、受験番号が記載されている面を表にして、監督者が見やすい位置に置いてください。なお、上記以外のものについては、監督者の許可を得てください。
- 8 問題検討のためのラインマーカー及び色鉛筆の使用は、問題用紙に限り認めます。
- 9 携帯電話等は、必ず電源を切って鞆等にしまってください。
- 10 試験室内では、耳栓の使用はできません。
- 11 試験時間中の発病等やむを得ない場合には、黙って手を挙げ、監督者の指示に従ってください。
- 12 試験時間中の喫煙や飲食（ガム等を含む。）は、禁止します。
- 13 試験終了の合図とともに、直ちに筆記具を置き、監督者の指示を待ってください。
- 14 不正の手段によって試験を受け、又は受けようとした者に対しては、試験を停止し、合格の決定を取り消すことがあります。

〔問 題〕

次の文章を読んで、後記【設問 1】及び【設問 2】に答えなさい。

自己統治とガヴァナビリティー

世紀が新しくなったということは、やはり特別な意味をもつ。人間が天文学的に時を計算し、暦を作り、新しい年を祝い、「世紀」という概念を導入したことには、社会制度的に重要な働きが含まれているからだ。

人間の好みや意見は移ろいやすい。今日あることを決断しても、明日にはまったく別のことに関心が向かい、昨日の決定を容易にくつがえしてしまうことがある。個人差はあるが、概して人間の自己規律の能力は完璧にはほど遠い。要するに「自己統治」は難しいのである。そこで暦を用いて時を区切り、人間は自己を精査し、自己確認し、合理性や首尾一貫性をめざす機会をつくろうとしてきた。時の循環性と「区切り」を意識することによって、われわれは、厄介な自己をできる限り規律づけようとしてきたのだ。

「新年の決意」や「新世紀にあたっての心構え」をばかばかしいと笑うことは、人間精神の弱さに対する無理解から来るといってもよい。心構えや危機意識の持ち方が、人間や国家の将来を大きく左右するということを決して忘れてはならない。個人の規律なくして、国家の規律はありえないからだ。

このように理解しつつ、「新しい世紀」の日本の姿を描くとどうなるだろうか。一般にはペシミズムが支配的であるが、明るい材料もある。材料を生かすも殺すもわれわれ次第であるから、歴史決定論的な予測は基本的には慎むべきであろう。日本がこれから活路を見出せるか否かは、まさにわれわれの思いと行動にかかっているからだ。その際、「この点」に留意しなければペシミスティックな予想がそのまま実現しかねない、というポイントがいくつかある。いずれも国家統治と「時間」あるいは「スピード」という点に関連している。

ひとつは「時間がない」という理由から、われわれの「事実」を把握する力、粘り強く論争する能力、良いものを生み出す意欲が、極端に低下したのではないかという点である。

たとえば人材の育成や発掘に、一世代前ほど時間をかけなくなってしまったのではなかろうか。時間をかけて次世代を育てるという体制が失われつつある時、人材を獲得するための最も容易な方法は、すでに評価の定まったものだけを奪い合うというやり方である。

他面、こうした姿勢は、組織のリーダーは「古顔」にまかせればよいという考えと同居しがちになる。選抜に時間をかけずに、「古顔」にまかせておくのが手っとり早いからだ。その結

果、組織の若返りが難しくなり、改革も進まなくなる。加えて高齢化が、若い次世代の人材育成をさらに阻むという悪循環が生まれる。

おそらく日本は、組織の要職に就く人間が世界相場から見てかなり高齢化している国のひとつであろう。もちろん例外もあるし、経験が重視されるという高齢化の良さもある。高齢者の判断のほうが、若い人のそれより、スピードを別にすれば、よりの確なことが多いのは確かかもしれない。しかし能力を発揮できそうな若い人が、成長する機会を十分に与えられていないことは、人的資源の大きなロスになるだろう。

さまざまな活字や映像のメディアに登場する人材も同じである。同じ人物が何度も現れ、同じことを繰り返す。人材の発掘や育成にコストを払わず、すでに出回っているものを利用するという姿勢がここにもある。

その最大の弊害のひとつは、専門的知識が軽視されるということであろう。いかに有能であっても、ひとりの人間が知っていること、考えることには限界がある。したがって近年のこうした傾向は、国民がきわめて限定された情報にさらされつづけていることを意味している。専門知識を軽視する傾向は、国民の側の事実認識能力をいちじるしく低下させるだけでなく、新しい形の画一主義を生みかねない。マスメディアが均質な情報だけを流すということは、国民を多様な情報や専門的な考え方から遮断するということである。

元来、意見というものは、それが本来持っている価値に比例して重みを発揮するというものではない。繰り返された意見が人々に染み渡り、強い影響を及ぼすというケースのほうがむしろ多い。ただでさえマスメディアからの情報は均質化しているのに、行政からの干渉でメディア情報を規制するという発想はどう考えても受け入れがたい。

実はこの点は国家統治とも深くかかわってくる。統治のリーダーシップはもちろん重要であるが、同じく重要なのは、リードされる能力、あるいは「統治される能力」であろう。リベラル・デモクラシー（自由な民主制）の存立にとって不可欠な条件は、意見を異にする者同士が、共存する知恵をもっているかどうかということである。自分と異なる意見を尊重し、それと共存するという矛盾に満ちたリベラル・デモクラシーの本旨は、もともと自然に反するところがあった。したがってその定着と維持には、意識的努力が不可欠なのである。

かつては、独裁権力が意見の画一化を強制しようとしたが、いまや権力の中枢にある「大衆」が、同じことをほとんど無意識に実行しようとしている。「大衆は、大衆でないものとの共存を望まない」と看破したスペインの哲学者オルテガは、「共存への意志」を示すリベラル・デモクラシーを、「人類がかくも美しく、かくも矛盾に満ち、かくも優雅で、かくも曲芸的で、かくも自然に反することに到着したということは信じがたいことである」と述べた（オルテガ『大衆の反逆』）。

ひとつの社会のもつ知識が高度化するということは、さまざまな変化への対応能力を高めることではある。しかし同時に進行する知識の均質化が、社会の活力を奪い去るという側面もある。米国社会は、異質な社会的・文化的背景をもつものを受け入れつづけてきた。この歴史的事実の中には、若いエネルギーを取り入れてきたということ、周辺の文化圏から異質な力を吸収してきたということが含まれる。この吸収プロセスこそ、リベラル・デモクラシーの下で、国民の「統治される能力」が鍛え上げられ成熟化する過程であった。「統治される能力」を持つ者の中からリーダーは選ばれる。誰もが嘆く昨今の日本の政治機能の不全と「リーダー不在」は、まさにこの「統治される能力」の不足と表裏一体をなす。

こうして人とシステムの整備には時間をかけるべきだが、同時に意思決定のほうは迅速化されなければならない。民主政治が、討論と合意に基礎をおく以上、迅速な判断に適さないことはあらためて指摘するまでもない。

しかし現実には、経済活動が地球規模に拡大し、経済に関する情報の流れがますますスピードを増し、現場の情報を必要としない分野が格段に増えた。このような仮想的現実の下で展開される活動（典型的には一部の金融取引）が大きなウェイトを占めるようになった現在、時間がかかるといふ民主政治の欠陥は、ますます深刻になりつつある。政府の機能の中で、経済的なものが増大してしまった現実を考えると、民主的プロセスを経るべき問題と、緊急の判断を要する例外問題とを選別することが必要になってきた。

しかし、ここにもひとつの矛盾が含まれている。政策決定をスピード・アップするということは、決定機構を集中化するということでもある。これは決定を民主的手続きに委ねないわけであるから、いわゆる「参加」を標榜する近年の時代の流れと逆行するシステムを模索することになる。

これからの「国家統治」に必要な精神的態度は、こうした「矛盾」を矛盾しない形に峻別し、使い分けていくことであろう。そのためには最近の日本を覆う惨めな混乱とわれわれのシマリのなさを反省し、緊張感を回復する必要がある。福沢諭吉の名言をもじると、「一身を統治して、一国の統治なる」ということであろうか。これこそ、ガバナンス（統治）の真の意味なのである。

（猪木武徳『自由と秩序 競争社会の二つの顔』（2001年 中公叢書） 63～67頁）

【設問 1】（100点）

「統治される能力」についての筆者の見解を400字以内で説明しなさい。

【設問 2】（200点）

下線部の「民主的プロセスを経るべき問題」と「緊急の判断を要する例外問題」に当てはま

と思われる具体的事例を一つずつ挙げて、それぞれ、その理由・根拠を示しなさい（1000字以内）。

